



Title	「真である」という性質が「実質的ではない」とはどういうことか
Author(s)	原田, 淳平
Citation	メタフュシカ. 2018, 49, p. 127-139
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/71249">https://doi.org/10.18910/71249</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「真である」という性質が「実質的ではない」とはどういうことか

## 「真である」という性質が「実質的ではない」とはどういうことか

原田淳平

### はじめに

近年の真理の理論（theory of truth）では、伝統的に認められてきた真理の重要性を縮小しようとする立場が主流派を築いており、この立場は一般にデフレ主義（deflationism）と呼ばれる。デフレ主義に属する理論は多数存在するが、この立場に共通するひとつの特徴として、「真理は実質的（substantive）な性質ではない」という主張がしばしば挙げられる。しかしながら、「実質的ではない」という性質が何を意味しているかは、この語だけでははっきりしない。また、多くのデフレ主義者の著作でもこのことは詳しく論じられていないのが現状である。したがって、デフレ主義の主張を明確にするためには、「実質的ではない」という性質が何を意味しているかを明らかにする必要がある。本稿では、①形而上学的に透明な性質、②構成理論を持たない性質、③説明的力を持たない性質、④論理的性質、⑤豊富な（abundant）性質という5つの「実質的ではない」という性質の候補を検討する。この分析に対する本稿の結論は、いずれの性質も「実質的ではない」という性質の候補にはならない、である。この結果を踏まえて私は、真理の性質に関するデフレ主義の見解は、「実質的ではない」という性質の内容が不明であるという点で理解可能ではないと主張する。

### 1 真理の理論とデフレ主義

真理の理論の目的は、端的にいって、「真である（true）とは何か」という問い合わせることである。だが、この答え方は2つの異なる意味で解釈できる点で曖昧である。有意義な議論をするためには、この問い合わせを次の2つのうちどちらを問題としているのかを区別しなければならない。

- (i) 「真である」という語はどんな言語的機能や役割を持っているのか。
- (ii) 「真である」という性質の内容は何であるか。

簡潔に言うと、(i) は真理述語（truth predicate）・真理概念の問題、(ii) は「真である」という

性質の問題である。(i) と (ii) は独立した問題であるため、明確に区別する必要がある。なぜならば、(i) は何かを表象する (represent) 語や文といった言語のレベルの問題であるのに対して、(ii) はそうした語や文といった bearers によって所有される性質のレベルの問題なので、問題の位相が異なるからである。このことは、「水である」という性質と「H<sub>2</sub>O である」という性質が同じであったとしても、「水」という概念と「H<sub>2</sub>O」という概念が一致するとは限らないことからも明らかである<sup>1</sup>。

「真であるとは何か」という問い合わせに対する答えとして最も有名なのは、真理の対応説 (correspondence theory of truth) や真理の整合説 (coherence theory of truth) といった伝統的な理論である。これらの理論は真理に論理的機能以上の哲学的重要性を認めることと、後述するデフレ主義との対比で、インフレ主義 (inflationism) と呼ばれる。このように真理の重要性を膨らませようとする対応説や整合説は、「真である」を次のように説明する。

【対応説】 $p$  が真である iff  $p$  が実在と対応している<sup>2</sup>。

【整合説】 $p$  が真である iff  $p$  が受け入れられている信念体系と整合する。

では、この説明は (i) や (ii) にどのように答えているのか。まず (i) について、この説明は双条件法を用いることで真理述語が、何とパラフレーズ可能かを述べている。すなわち、【対応説】では「実在と対応している」という述語、【整合説】では「受け入れられている信念体系と整合する」という述語が真理述語とパラフレーズ可能であり、それが (i) に対する答えである<sup>3</sup>。(ii) についても同じように、この説明は双条件法を用いて、bearers が命題であれ文であれ、それらに帰属する性質「真である」がどんな性質と交換可能かを示している。すなわち、【対応説】では「実在と対応している」という性質、【整合説】では「受け入れられている信念体系と整合する」という性質と、「真である」という性質は交換可能だというのが (ii) に対する答えである。したがって、【対応説】や【整合説】は、(i) と (ii) の両方に答える理論だと言える。

これに対して、Horwich に代表される近年のデフレ主義は、次に示す同値図式 (equivalence schema) や引用解除図式 (disquotational schema) を用いることで真理を説明する（以後、何らかの図式を用いて真理の説明を与えるデフレ主義の理論を図式デフレ主義と呼ぶ）。

【同値図式】 $\langle p \rangle$  が真である iff  $p$ <sup>4</sup>。

【引用解除図式】'p' が真である iff  $p$ 。

これに基づいて図式デフレ主義者は、真理述語は一般化や引用解除といった論理的機能のみを持

<sup>1</sup> 19世紀より前の人間は、「水」の概念は所有するが「H<sub>2</sub>O」の概念は持たない。

<sup>2</sup> 本稿では「if and only if」の省略として「iff」を用いる。

<sup>3</sup> ただし、【対応説】や【整合説】の説明だけでは、真理述語が一般化や引用解除といった機能を持っていることは理解できない。したがって、この説明は真理述語の全言語的機能を説明しているわけではない。

<sup>4</sup> 本稿では $\langle p \rangle$ を「 $p$ という命題」、'p'を「 $p$ という文」の省略として用いる。

ち、「真である」ということに関するすべての事実は上の図式によって尽くすことができる、という点を強調する。これが正しいとすると、真理述語が持つすべての機能を明示している点で、図式デフレ主義は (i) に対する完全な解答を与えている。問題は (ii) について図式デフレ主義がどのように答えるかである。少なくとも上の説明は、(ii) に対して直接答えているわけではない。これについて近年のデフレ主義者は、真理述語の意味が何らかの図式によって尽くされるという主張に加えて、「真理は実質的な性質ではない」と別途主張することで、(ii) に対しても解答している<sup>5</sup>。この解答は明確にインフレ主義と対立する。というのも、「真である」という性質は実質的ではないと主張することで真理が中身のない性質だとデフレ主義はみなすのに対して、インフレ主義が主張する「実在と対応している」や「整合している」といった性質は、少なくとも哲学的分析を要するという点で内実のある性質だからである。だが、はじめにでも述べたように、この「実質的ではない」という性質の内容は自明ではない。したがって、デフレ主義の主張、ひいてはインフレ主義とデフレ主義の対立点を明確にするためには、この「実質的ではない」という性質が何であるかを明示する必要がある。

具体的な議論に入る前に4点ほど補足しておきたい。第一に、本稿の目的は「実質的ではない」ということでデフレ主義者は一体何を想定しているのかであるため、本稿では主に (ii) のみを扱い、(i) については必要に応じてのみ取り扱う。何らかの原理を付け加えることで (i) へのコミットから (ii) へのコミットを導き出すことは可能かもしれないが、本稿ではそれについては扱わない<sup>6</sup>。第二に、本稿では議論の煩雑さを避けるため、取り扱う理論を「真である」という性質が存在すると認めるデフレ主義（本稿で言うと図式デフレ主義）だけに制限し、「真である」という性質は存在しないと主張するデフレ主義（Ramsey (1927) や Strawson (1950) など）については扱わない。簡単にその理由を述べておくと、① Horwich に代表される近年のデフレ主義の方が理論的に洗練されている、② 意味の理論（a theory of meaning）を与えるために述語「真である (true)」の指示対象として性質が必要とされるからである。第三に、本稿では図式デフレ主義の代表として Horwich のミニマルな理論（minimal theory）をとりあげ、分析の主対象とする。その理由は、Horwich 自身がミニマルな理論を批判的に検討しており、結果として理論の細部が最も明らかにされている理論だからである。最後に、本稿では以後、真理に関して、述語（'is true' ないし 'true'）を指示する場合は真理述語、概念（concept of truth）を指示する場合は真理概念、性質（property of truth）を指示する場合は真理性質と表記する。それらを特に区別せず、ラフに用いる際は単に真理と表記することにする。

<sup>5</sup> このような主張をしている代表的な図式デフレ主義者は Horwich (2008)、Field (2001)、Künne (2003)、Williams (1999) である。

<sup>6</sup> 本文で述べた通り、(i) と (ii) は異なるレベルに属するため、(i) から (ii) を導き出すことは困難が予想される。デフレ主義がしばしば言及する一般化などの言語規則や推論規則が支配するのはあくまで文や語のレベルであって、言語表現が表示する性質までは及ばない。したがって、(i) から (ii) を導くためには、少なくとも両者をブリッジする何らかの原理が必要である。

「真である」という性質が「実質的ではない」とはどういうことか

## 2 形而上学的に透明な性質

Lynch は、真理概念と真理性質はレベルが異なると理解した上で、デフレ主義の真理概念に対する主張と真理性質に関する主張を結びつけることを試みている。Lynch よりれば、デフレ主義者が主張する「実質的ではない」という性質は形而上学的に透明（metaphysically transparent）であることを指している。このことを Lynch は次のように説明している。

現代のデフレ主義者は、同一性の存在という概念が性質ないし関係を表現するのと同じ意味で、真理概念がある性質を表現することを認める。そのような性質は、「形而上学的に透明」あるいは「冗長な（pleonastic）」性質と呼んでも良いだろう。形而上学的に透明な性質は、その概念の把握では明らかにされない根底にある本性というものを持たない。すなわち、その概念の把握がその性質に関するすべての本質を教えるのである<sup>7</sup>。

1つ補足しておくと、もちろん概念と語は別の存在者だが、Lynch はこの文脈で真理概念と真理述語（の意味）をほぼ同じものとして扱っている。これは、Horwich が両者を同義としていることに存している<sup>8</sup>。以後本稿でも、特に区別する必要がない限り真理述語と真理概念は区別しないで用いることにする。

さて、Lynch の形而上学的に透明という性質をもう詳しく分析していこう。まず、上で述べた通り、Lynch の説明は図式デフレ主義における真理概念・真理述語と真理性質を関係づけるものである。これは次のように定式化できる。

【形而上学的に透明】ある性質  $F$  が形而上学的に透明である iff  $F$  はその概念の把握によって明らかにされない本性を持たない。

だが、Eklund が指摘しているように、この説明からでは上の「その概念」が何を意味しているかが理解できない。「その概念」の内容として、Eklund は次のようにすることを提案している。

【形而上学的に透明 \*】ある性質  $F$  が形而上学的に透明である iff  $F$  に関する通常の概念の把握によって明らかにされない本性を  $F$  は持たない<sup>9</sup>。

ここでの「通常の概念」とは、私たちが日常的に考えたり話したりする概念のことを指す。図式デフレ主義者は、ごく一部の人間だけが真理概念を所有しているのではなく、私たちのほとんどは真理概念を所有していると考えるため、この定義を受け入れることは問題ないと思われる。

では「真である」の場合、「通常の概念」とは一体何を指しているのか。図式デフレ主義者によ

<sup>7</sup> Lynch, 2010, 106-107.

<sup>8</sup> Cf., Horwich, 1998, 37.

<sup>9</sup> Eklund, 2017, 8.

れば、真理概念は同値図式や引用解除図式といった図式の諸事例によって構成される。したがって、当然すべての無矛盾な図式の諸事例が「通常の概念」の範囲だと考えられる。しかしながら、この考えには反論が存在する。Horwich のミニマルな理論に対する批判として、Gupta は次のように述べている。

MT（ミニマルな理論）はすべての命題に対する双条件法を含んでおり、例外は存在しない。それゆえ、MT という思想はありとあらゆる概念を含む。MT はすべての理論の思想を含むのである<sup>10</sup>。

MT が含む双条件法の中で用いられている概念には、誰もほんの僅かすら知らない概念が含まれている。それにもかかわらず、私たちは真理概念に関する優れた理解を持っている<sup>11</sup>。

ここで Gupta が指摘しているのは、図式から生み出される諸事例すべてが真理概念を構成するのみなすとき、その事例の中には誰も知らないような（あるいはごく少数のみが知る）事例も存在するので、これが正しいとすると誰も完全な真理概念を持つことはできない（あるいはごく少数のみが持つことができる）、ということである。これは真理概念の把握を図式の諸事例と結びつけて理解した結果であるため、Horwich のみならず、すべての図式デフレ主義に当てはまる論点である。もちろん、もし真理概念の把握を図式の諸事例から切り離し、別の仕方で把握する方法を採用するならばこの反論は回避可能である。あるいは個人毎に異なる真理概念を所有しているという立場にコミットすることでも回避可能である。しかしながら、真理概念の把握に図式の諸事例以外は必要ないと主張するのが図式デフレ主義であるため、図式デフレ主義はこれらの選択肢を採用することはできない。したがって、図式デフレ主義が実質的ではない性質を形而上学的に透明という性質として理解することには問題がある。

### 3 構成理論を持たない性質

Dodd は対応説を批判するにあたって、次のように述べている。

（デフレ主義によれば）真理が何に存するのかという説明は存在し得ない。というのも、すべての真であるもの（命題・文など）が真であるのはそれらが  $F$  だからである、という仕方で、すべての真理そして真理のみに共有される性質  $F$  を探し出す見込みはないからである。 [...] デフレ主義者の主張は対応説の単なる拒否よりも強力である。すなわち、真理を説明する性質  $F$  を探すという対応説論者が引き受けたプロジェクトが見当違いである、ということがデフレ主義の主張なのである<sup>12</sup>。

<sup>10</sup> Gupta, 1993, 265. 括弧は引用者。

<sup>11</sup> Ibid, 1993, 266.

<sup>12</sup> Dodd, 2008, 133-134. 括弧は引用者。Dodd 自身はデフレ主義者ではなく、真理の同一説（identity theory of truth）を支持している。

Horwich (1998, 111) も同様のことを述べており、その上で、ある性質が実質的な性質であるとの基準として次のような形の構成理論 (constitution theory) が存在するかどうかを提案している。

【構成理論】 $x$  は真である =  $x$  は  $F$  である<sup>13</sup>。

Horwichによれば、構成理論を持つのは「水である」や「木である」といった「複雑な (complex) 性質」ないし「自然主義的 (naturalistic) 性質」である<sup>14</sup>。Horwichはこれらの性質の詳細について言及していないが、こうした性質の例として「ターコイズである」や「木である」といった性質を挙げているため、おそらく次のような形でより基礎的な性質へと還元可能であることを想定していると思われる。

【「水である」の構成理論】 $x$  は水である =  $x$  は  $H_2O$  である。

【対応説の構成理論】 $x$  は真である =  $x$  は実在と対応している。

【「水である」の構成理論】については正しい構成理論だと Horwich は認めるが、当然 【対応説の構成理論】に関しては否定する。上で述べたとおり、すべての真であるものに共通する性質は存在しないと考えるからである。以上を整理すると、性質の実質性を構成理論の有無で決定するアプローチは次のように表現できる。

【構成理論による実質性の定義】 $x$  は実質的性質である iff  $[x \text{ は } x \text{ の事例すべてに共有されている性質である} \wedge x \text{ は構成理論を持つ}]$  ([ ] 内が右辺)。

では、構成理論を持つことが実質的であることの基準だとするアプローチは妥当だと言えるだろうか。残念ながらこのアプローチにはふたつ問題がある。第一に、真理性質は構成理論を持たないにもかかわらず、実質的であることが可能である。Russel や Davidson といった真理の原初主義者 (primitivist) は、まさにこの立場を支持している<sup>15</sup>。この立場によると、「真である」は基底的な性質であるため、より基礎的なものへと存在論的に還元したり、明示的定義を与えたりすることは不可能である。しかしながらこの性質は、その性質が適用されるすべての事例そしてその事例にのみ、言い換えれば、すべての真であるもののみに共有される性質である。このことは、「真である」という原初的な性質は、この性質が適用されるすべての事例で共有されているにもかかわらず構成理論を持たないことを意味している。他方で、真理の原初主義は事実や命題、意

<sup>13</sup> Horwich, 1998, 143.

<sup>14</sup> Cf., Horwich, 1998, 37. 本文で述べた通り、Horwich はこの性質について詳しく定義していない。本稿では 6 で言及する Lewis の自然的性質と同じものとして扱っている。

<sup>15</sup> Cf., Russell, 1903, § 52, Davidson, 1996. ただしラッセルは後に対応説に転向している。

味といった概念の理解に真理概念は寄与すると考えており、これは図式の諸例示だけでは説明することができない真理の役割である。このことは真理に実質性を見てとっている証左と言えるだろう。それゆえ、真理の原初主義にしたがうと、【構成理論による実質性の定義】の左辺が成立するにもかかわらず、右辺が成立しない。したがって、ある性質が実質的だったとしても（そしてその性質が適用されるすべての事例で共有されているとしても）、その性質が構成理論を持つことは帰結しない。

第二に、ある性質が実質的とは言えないにもかかわらず、その性質が適用されるすべての事例で共有されている性質が存在し、かつ構成理論を持つ場合が存在する。例えば、Goodman が提唱した *grue* という性質は次のような構成理論を持つ。

*x* は *grue* である iff *x* は緑である、あるいは青である<sup>16</sup>。

*grue* のような、任意の性質を選言肢で結合した性質を選言的性質 (disjunctive property) と呼ぶ。例えば、「ユニコーンである、あるいは  $1 + 1$  である」という性質は、「ユニコーンである」という性質と「 $1 + 1$  である」という性質を選言肢で結合した選言的性質である。したがって、この性質が適用される事例には、「ユニコーンである」という性質を共有している事例と「 $1 + 1$  である」という性質を共有している事例の 2 種類がある。そのため、この選言的性質はすべての事例間で共有される性質を持たない。またこの性質が適用される諸事例が有意義なまとまりになっていないという点で、個々の選言肢は有用だとしても、性質全体としてはトリヴィアルであり、中身のない性質だと見える。これは、選言的性質は実質性に乏しいことを意味している。したがって、ある性質が構成理論を持ち、その性質はその個々の事例すべてに共有される性質であるとしても、その性質は必ずしも実質的であるとは限らない。これは、【構成理論による実質性の定義】の右辺から左辺が帰結しないことを示している。

以上のふたつの理由により、構成理論を持つかどうかは性質の実質性を決定する基準としては不十分である。それゆえ、デフレ主義の主張する「実質的ではない」性質の内容を、構成理論を持たない性質だと解釈することはできない。

#### 4 説明的力を持たない性質

伝統的に、真理と関係する哲学的に重要な概念、例えば認識的正当化 (epistemic justification) や知識、主張、合理性、意味といった概念は、真理概念を用いて説明されると考えられてきた。例えば、認識的正当化の目的は真であることを目指すこと、知識は正当化された真なる信念 (justified true belief)、主張はフレーゲによれば文を真であるとして提示することなど、真理概念を用いることで当該の概念を説明することができる例は枚挙にいとまがない。インフレ主義が真

<sup>16</sup> Cf., Goodman, 74. Goodman 自身は、*grue* を「ある時刻  $t$  よりも前に調査されたすべてのものに、それが緑である場合に適用されるが、それ以外のものについては、それが青である場合に適用される」ものと説明している。今回は複雑さ避けるため、単なる選言的性質として *grue* を用いている。

理に哲学的重要性を置くのは、まさに真理概念がこのような説明力を持つと考えているからである。これに対してデフレ主義は、真理についての語りの重要性は、一般化や意味論的上昇といった真理述語の表現的な機能によって尽くされると主張し、真理概念が説明的であることを否定している<sup>17</sup>。伝統的に真理と関係すると言われてきた概念を真理抜きでどのように説明するかについては、Horwich (1998, ch3) が具体例を提示している。Horwich の戦略は、同値図式によって  $\langle p \text{ is true} \rangle$  を  $p$  に置き換えることで特定の概念の説明から真理述語を消去してみせ、どの概念も真理述語抜きで説明できることを示すという方法である。しかしながら、本稿ではこの点については深く立ち入らない。というのも、上の主張はみな真理述語・真理概念についての主張だからである。本稿で問題としているのはあくまで真理性質のみである。インフレ主義とデフレ主義双方の著作の中で、この区別が曖昧なまま議論されていることがままあるが、1で述べたとおり、真理述語・真理概念の問題と真理性質の問題は独立しており、明確に区別する必要がある。したがって、以下で検討したいのは、真理性質が実質的であるかどうかを考えるとき、その実質性の基準を説明的力の有無に置いてよいのか、ということである。

Wyatt (2016) は、真理性質は説明的力を持たないというデフレ主義の主張を次のように定式化している<sup>18</sup>。

【説明的力を持たない性質】真理性質は存在するが、この性質についての諸事実によって説明される事実は存在しないという点で、この性質は説明的力を欠く。

さて、これは真理性質の説明になっているだろうか。この説明が答えているのは、真理性質とは何かというより、真理性質の機能とは何かであるように思われる。このことは、「 $F$  は  $G$  である」と「 $F$  は  $G$  という特徴を持つ」という表現形式の差異を認識することで明確になる。「 $F$  は  $G$  である」が指定文（あるいは同一性文）として用いられたとき、 $F = G$  が成立し、また  $F$  と  $G$  は交換可能である。「真であるとは実在と対応することである」という対応説の主張がまさにその例である。対して、「 $F$  は  $G$  という特徴を持つ」では、 $F = G$  は成立せず、 $F$  と  $G$  も交換不可能であり、両者は別の存在者だとみなされる。例えば、「素数は有理数という特徴を持つ」はこの形式を持っている例である。これを踏まえて上の Wyatt の説明をみると、真理性質は「説明的力を持たない性質」と同一だと主張されているわけではないことに気づく。そこで言われているのは、「実質的ではない」という性質は「説明的力を持たない」という特徴を持つというだけである。このことは、Wyatt の説明には双条件法が用いられていないことからも理解できる。説明的力を

<sup>17</sup> Cf., Williams, 1999, 547.

<sup>18</sup> Cf., Wyatt, 2016, 372. Wyatt 自身は「この性質についての諸事実」ではなく、「真である」という性質の本性についての諸事実」としている。しかしながら、「本性についての諸事実」という表現では、本性以外に関する諸事実の存在や、本性以外の諸事実は説明的力を持つのか、といった疑問を生じさせる可能性がある。不要な複雑さを回避するために、本稿では単に「この性質（真理性質）についての諸事実」という表現に変更している。

持たない性質は、真理性質以外にもおそらく存在すると考えられる<sup>19</sup>。したがって、説明的力を持つかどうかが、実質的性質の内容だと解釈することはできない。ある性質が説明的力を持つことは、その性質が実質的であることから生じているに過ぎないからである。本稿で求めているのは、「*F*は*G*である」という形で、実質的である性質とは何かという問い合わせに対して答えることである。それゆえ、仮に真理性質が説明的力を持たないことが事実であるとしても、本稿が求めているものが得られたわけではない。その上で、そのような説明的力を欠いた真理性質とは結局のところどんな性質か、を問う必要があるからである。

## 5 論理的性質

図式デフレ主義は、真理述語に関するすべての事実はある種の図式によって説明し尽くすことができると主張し、真理述語が持つのは一般化のような言語的機能のみであることを強調する。一定の言語的機能を果たすことがその語の存在意義であるようなものを、論理的述語（logical predicate）と呼ぶ。Field が例として挙げているのは、「存在（exists）」や「同一（equals）」などである<sup>20</sup>。McGinn や Künne は真理述語が論理的述語であることに基づいて、真理性質は論理的性質だと主張している<sup>21</sup>。このとき前提されているのはおそらく、真理述語が論理的述語（logical predicate）であることから、真理性質もそれに対応する性質、すなわち「論理的性質」を持つ、を導出する推論である。しかしながら、既に述べたように、真理述語の問題と真理性質の問題は独立しており、一方での結果（「水である」という性質 = 「H<sub>2</sub>O」という性質）が、他方でも同じように成立するとは限らない（「水である」という概念 ≠ 「H<sub>2</sub>O」という概念）。したがって、この推論には明らかな飛躍が存在する。

残念ながら、真理性質を論理的性質だと主張する Field や McGinn、Künne は、この点について詳細に論じていない。はっきりしているのは、現時点では真理述語に関する一定の立場へのコミットから、真理性質に関する何らかのコミットが帰結すると考える理由は何もない、ということである。したがって、論理的性質はそもそもそれが何を意味しているのか明らかではないので、実質的ではない性質の候補にもなり得ない。

## 6 豊富な性質

Edwards (2013) はデフレ主義における真理性質の内容は、豊富な性質だと考えることを提案している。豊富な性質およびそれと対置する希少な性質（sparse property）の区別は Lewis (1983) によって導入された。Lewis によれば、希少な性質と豊富な性質の区別は相対的であり、一方の極値に最大限に希少な性質（ルイスの術語で言うと、完全な自然的性質（perfectly natural property））、

<sup>19</sup> Field は「存在（existences）」や「同一（equals）」を論理的述語（logical predicate）として挙げている。Cf., Field, 1992, 322. これらは本稿で言うところの、形而上学的に透明な性質に相当すると思われる。形而上学的に透明な性質は引用解除図式によって説明し尽くされるトリヴィアルな性質であるため、説明的力は持たないと考えられる。

<sup>20</sup> Cf., ibid, 322.

<sup>21</sup> Cf., McGinn, 2002, 107, Künne, 2003, 338.

他方の極値に Goodman の grue のような選言的性質がある。ある性質がどれほど希少か（あるいは豊富か）は、完全な自然的性質からの「定義可能性の鎖」の長さで決定される<sup>22</sup>。この区別をインフレ主義とデフレ主義に適用するならば、真理性質について、完全な自然的性質（希少な性質）から近いと考えるのがインフレ主義で、離れており選言的性質（豊富な性質）に近いと考えるのがデフレ主義になる。では、この区別は性質の実質性の基準となるだろうか。

残念ながら、この区別では実質性を特徴づけることはできない。例えば、対応説が主張する「实在と対応する」という性質、より具体的に言えば、「事態と同形である」という性質 (being isomorphic to a worldly fact) が完全な自然的性質からどれほど離れているかを考えてみよう。Lewis が完全な自然的性質として挙げているのは、「質量 (mass)」や「電荷 (charge)」といった物理学の性質である。このとき、「事態と同形であるという性質」は、明らかに「同形」や「事態」という物理学の術語ではないものを含んでいる。したがって、この性質は当初想定していたよりもずっと「完全な自然的性質」からは離れていることが分かる。これが正しいとすると、「定義可能性の鎖」の長さを用いたインフレ主義とデフレ主義の区別では、その境が曖昧なものにならざるを得ない。したがって、この区別は性質の実質性を決定する基準としては不十分である。

このアプローチの代わりに Edwards は「因果説明的関係において、その性質が真正の (genuine) 類似性や特徴を基礎づける<sup>23</sup>」かどうかという基準を提案している。この基準 자체は希少な性質と豊富な性質を区別するための基準だが、この区別をインフレ主義とデフレ主義の主張の差異に置き換えることで、インフレ主義の真理性質を希少な性質、デフレ主義の方を豊富な性質として解釈できると Edwards は考えている。

では、この基準が性質の実質性のテストとして機能するかを検討する前に、まずこの基準に用いられている「真正の類似性」の内容を確認しよう。「真正の類似性」とは大雑把に説明すると、すべての赤いものだけが共有する「赤い」という類似性のことである。これが真正の類似性と呼ばれるのは、任意の 2 つないし複数の事例が持つ類似性ではなく、あるクラスに属する事例すべてが共有する類似性のことを意味するからである。したがって、仮に真理性質が希少な性質であり、対応説が正しいとしたら、「实在と対応する」という性質はその性質が帰属する bearers の間の真正の類似性を基礎づける、ということになる。反対に、真理性質が豊富な性質だとしたら、真理性質はその性質が帰属する bearers の間にどんな真正の類似性も基礎づけない、ということになる。この Edwards の提案は実質性の基準になるだろうか。

結局のところ、この提案は説明的力の有無によって実質性を説明しようとすることと、同じ過ちを犯しているように思われる。というのも、この提案も「実質的ではない性質とは何か」という問い合わせに対して、「F は G である」という形ではなく、「F は G という特徴を持つ」という形で答えているからである。「bearers 間の真正の類似性を基礎づける」というのは、実質的な性質の特徴であって、実質的性質とは何かという問い合わせに対する答えではない。ある性質が真正の類似性を基礎づけることは、その性質が実質的であることによって生じているに過ぎない。そして説明

<sup>22</sup> Cf., Lewis, 1984, 66.

<sup>23</sup> Cf., Edwards, 2013, 12.

的力のときと同じように、真正の類似性の基礎づけることができるのは、実質的性質だけではない。Lewis の挙げている完全な自然的性質は、すべて真正の類似性の基礎づけることができる性質である。したがって、希少な性質と豊富な性質を用いた基準も、性質の実質性を測る基準にはならない。

## 7 結論

本稿では①形而上学的に透明な性質、②構成理論を持たない性質、③説明的力を持たない性質、④論理的性質、⑤豊富な性質の5つを検討してきたが、いずれも「実質的ではない」という性質の候補にはならないことが分かった。5つの中で「「実質的ではない」という性質とは何か」という問い合わせているのは、①と②だけである。③と⑤が答えてているのは、「実質的ではない」という性質が所有する特徴が何であるかであり、「「実質的ではない」という性質とは何か」ではない。したがって、本稿は③と⑤が「実質的ではない」という性質が持つ特徴として不適切だ、と主張したいわけではない。あくまで「「実質的ではない」という性質とは何か」に答えていない、と主張しているだけである。また、④については図式デフレ主義が詳細を与えていないので何を意味しているのか分からぬ、というのが実態である。少なくとも言えるのは、真理述語が持つ機能と対応する性質を真理性質も持つ、という主張には飛躍があり、そのギャップを埋める理論が必要だということである。以上の分析により、「真理性質は実質的な性質ではない」というデフレ主義の主張は、その内容が理解可能ではない点で有効ではない、と結論する。

(はらだじゅんpei 産学共創本部)

## 引用文献

- Damjanovic, N. (2010) 'New Wave Deflationism' in *Pedersen and Wright* (2010), 45-58.
- Davidson, D. (1996) 'The Folly of Trying to Define Truth', *Journal of Philosophy*, 93: 6, 263-79.
- Dodd, J. (2008) *An Identity Theory of Truth*. New York: Palgrave Macmillan.
- Edwards, D. (2013) 'Truth as a Substantive Property'. *Australasian Journal of Philosophy*, 91: 2, 279-294.
- Eklund, M. (2017) 'What is Deflationism about Truth'. *Synthese*, 194: 1-15
- Field, H. (1992) 'Critical Notice: Paul Horwich's Truth'. *Philosophy of Science*, Volume 59, 321-330.
- (2001) *Truth and the Absence of Fact*. Oxford: Clarendon Press.
- Gupta, A. (1993) 'Minimalism'. *Philosophical Perspectives*, 7 (Language and Logic), 359-369.
- Goodman, N. (1955) *Fact, Fiction, and Forecast*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Horwich, P. (1998) *Truth*, 2nd edn. Oxford: Oxford University Press.
- Künne, W. (2003) *Conceptions of Truth*. Oxford: Oxford University Press.
- Lewis, D. (1983) 'New Work for a Theory of Universals', *Australasian Journal of Philosophy*, 61: 4, 343-377.
- , (1984), 'Putnam's Paradox', Reprinted in Lewis (1999) *Papers in metaphysics and Epistemology* (56-77), Cambridge University Press.

「真である」という性質が「実質的ではない」とはどういうことか

- Lynch. M. P. (2009) *Truth as One and Many*. Oxford: Oxford University Press.
- McGinn, C. (2000) *Logical Properties: Identity, Existence, Predication, Necessity, Truth*, Oxford: Clarendon Press.
- Ramsey, F. (1927) 'Facts and propositions'. *Proceedings of the Aristotelian Society*, 7: 153-170.
- Russel, B. (1903) *The Principles of Mathematics*, London and New York: W. W. Norton & Company.
- Strawson, P. (1950) 'Truth'. *Proceedings of the Aristotelian Society*, 24: 129-156.
- Williams, M. (1999) 'Meaning and Deflationary Truth'. *Journal of Philosophy*, 96: 545-564.
- Wyatt, J. (2016) 'The Many (yet few) Faces of Deflationism'. *Philosophical Quarterly*, 66, 362-382.

## What do Deflationists Mean in Saying that ‘True’ is not a ‘Substantive’ Property?

Jumpei HARADA

Early deflationism such as redundancy theory of truth holds that we can eliminate the property of truth from our ontological inventory. But recent deflationism denies it in saying that truth is a genuine property, but that it is not ‘substantive’. Since inflationary theories of truth take it that truth has an underlying nature which is philosophically worthy to investigate, as opposed to deflationism, it is welcome for inflationism to accept that truth is a substantive property. Therefore, whether or not truth is considered to be insubstantive is the fine demarcation to distinguish deflationism from inflationism. However, the meaning of the word ‘insubstantive’ is far from crystal clear, and deflationists do not indicate what they take the characteristic features of ‘insubstantive’ properties to be. To unveil the contents of ‘insubstantive’, I investigate the following five theories such as 1. metaphysically transparent property, 2. lack of constitutional theory, 3. non-explanatory role, 4. logical property, 5. abundant property. In analyzing those theories, I want to make it clear that what is in question is the predicate/concept of truth or the property of truth. This distinction is vitally important in the debates between inflationism and deflationism because deflationists’ arguments tend to focus on the former, inflationists are apt to talk about the latter. By way of conclusion, I argue that neither of the five theories are able to give a full account of the ‘insubstantive’ property which deflationism takes truth to have.

### 「キーワード」

真理の理論、真理、デフレ主義、インフレ主義、形而上学